日本醫史學雜誌

第11巻　第2号

昭和40年4月30日発行

第66回日本医史学会総会
一般発表要旨

日　時：昭和40年5月16日
会　場：東京大学医学部
中央図書館3階講堂
会　長：緒方富雄

通巻第1360号

日本医史学会

東京都文京区本郷1～1
順天堂大学医学部医史学教授室内
振替口座・東京15250番

第66回日本医史学会総会一般発表要旨細目

1061年に沈括が製造した性ホルモン剤について……宮下　三郎……(1)
我が国における救急蘇生法の歩みについて……谷津三雄・武田充弘……(2)
禅僧鈴木正三の唱えた医師の倫理観……杉田　暉道……(2)
十日町の名医服部家……吉田　一郎……(3)
我が国の歯科医学分科史について……鈴木　勝・谷津三雄……(4)
「読腹証奇覧」を読んで……矢数　道明……(5)
「臓　画」……森　　優……(6)
「蘭学事始」の写本についての諸問題……内山　孝一……(7)
大槻玄沢著「西賓対晤」に関する研究……大鳥蘭三郎……(8)
藤井方亭と加賀藩……津田　進三……(9)
藤井方亭の資料「柿園文鈔」について……藤井　亭己……(10)
「依百乙薬性論」について……佐藤文比古……(11)
ポムペの梅毒学講義について……中野　　操……(12)
Comerfordの日本印象記……鮫島　近二……(12)
封建制下の農民の保健状態（第２報）……松田　　武……(13)
田口和美と明治の解剖事始め……小川　鼎三……(13)
日米医学の関連……長門谷洋治……(14)
金井泉博士著「臨牀検法提要」の初版刊行について……会田　　恵……(15)
富士川游先生の別号・筆名について……赤松　金芳……(16)
歴史的人間，特に日本生理学の伝統と創造について……内山　孝一……(17)
切手で見るオランダの医学史……古川　　明……(18)
ゲーテの「ファウスト」に於ける医学的事項について……藤森　速水……(19)
一元的体系による医学史研究，東西医学一元論……三木　　栄……(20)
第19回国際医学史会の報告……大矢　全節……(21)
日本医学放射線科学・技術史年表……今市正義・笠原和賀江・米田賀子……(22)

第六六回日本医史学会総会一般発表要旨

一〇六一年に沈括が製造した性ホルモン剤について

宮下　三郎

昨年秋、日本をおとずれたケンブリッジ大学の、ニーダム博士と魯桂博士は、イギリスの医史学雑誌八巻二号に興味ぶかい論文を発表している。Madiaeval preparations of urinary steroid hormones. と題するもので、「本草綱目」人部巻第五十二の薬物『秋石』の実体が、尿から精製した、かなり純度のたかい性ホルモンであることを、明快に論断された。両博士は「本草綱目」所引の文献を考証することによって、そのホルモン剤が、すでに北宋末には存在したと推定した。実は、この推定をうらずける資料として「聖剤総録」巻第一百八十五の秋石方の記事をはじめとして、追加すべき若干の記録がある。なかでも、もっとも興味ある記載のひとつとして、沈括の「蘇沈良方」を、あげることができるとおもう。沈括（一〇三一―九五）は浙江の人、敵の遼におもむき外交交渉に成功して、三司使（大蔵大臣）になった北宋の高級官吏である。彼は一〇六三年の進士（高文合格者）であるが、この二年まえ三十一才のとき、安徽の宣城で二種のホルモン剤をつくった。いずれも、沈括の独創ではなく、追試して成功をおさめたのである。一つは人の尿に皂莢をくわえ、蛋白とともにステロイド・ホルモンを沈澱させ、これを幾度も水洗し、最後に折出乾燥する方法（陰錬方）である。他は熱湯浸出してから昇華する法（陽錬方）で、熱湯浸出の操作によって、女性ホルモンを除去しており、前者と比較して男性ホルモンの含有量が、たかいはずである。一方、用法についても『此薬不但治疾。可以常服。有功無毒。』と、いわゆる保健薬的な服用法を、すすめている点に注意したい。

（京大・人文）

我が国における救急蘇生法の歩みについて

谷津三雄
武田充弘

我が国における麻酔史や、救急蘇生法史に関する研究は少ない。特に救急蘇生法は、その性質からして医術の最初のものであり、中心であつたことは想像に難くない。

演者らは我が国の救急蘇生法の歩みの一部を古書により明かにすることができたので報告する。

一、最古の救急法の書は一〇八一年（永保元年）成立の「医略抄」で、晋唐医三十四部の中から救急法に関し抜抄したもので、五十二の部門からなるが、漢薬が主で現在の救急法に比較して興味が薄い。

ただ八八四年前の救急法の一端を知る上での意義と現存するものは、寛政七年（一七九五年）即ち初版より七一四年後に再刊されたものであることは長期間に亘り、当時の代表的救急書であつたと考えられるのみならず、けだし驚異的なことといわねばならない。

そして、この「医略抄」で始つた我が国の救急法は、「普救類方」（一七二九）、「広恵済急方」（一七九〇）「救急選方」（一八〇一）「救急摘方」（一八五三）「救急撮要方」（一八五七）、「外療一般」（一八六六）「民間救急療法」（一八六九）「医師の来る迄（一名救急法）」（一八七四）「普通救急法」（一八八七）、「通俗遭難救療法」（一八九三）、日赤の「通俗救急処置」（一八九三）、「戦時平時救急看護法」（一八九五）「救急治療」（一八八〇）などを経て明治四十五年（一九一二）渡辺房吉著「臨床救急療法」の七六〇頁の大冊により、我が国の戦前における救急療法は一応完成されたものと考えられる。これら年代別に救急法の概要を報告したい。

尚、古書を読むに『五絶死』を取り扱つた救急法が多い。特に今回は、これら『五絶死』、に関係深い呼吸蘇生法の時代的推移についても併せ報告したい。（日大・歯学）

禅僧鈴木正三の唱えた医師の倫理観

杉田暉道

鈴木正三（しょうさん）という人は、日本仏教史上において殆ど存在を

認められていない仏教者である。しかしながら、かれの唱えた仏教のうちに、種々注目すべき近代的性格を見出すのである。かれは三河武士の出身である。天正七年に三河国東加茂郡則定郷で松平家臣たる鈴木氏の長子として生まれた。通称を九太夫という。旗本として重要な人であつたが、元和六年に四二才で出家した。かれの思想全体を通じて認められる著しい特色は、かれの横溢せる批判的精神である。とくに大規模な職業倫理論を展開したことは特筆されねばならない。今回はわれわれに最も関係ある医師の職業倫理をどのように唱えていたかということにつき、いささか述べてみたい。

（横浜市大・公衆衛生）

十日町の名医服部家

吉田一郎

越後国十日町（現在新潟県十日町市）に承応年間初代服部三吉良より現今の服部博に至る十代にわたる歴世医を業とし、その間繁栄し、時に数奇の運命をたどつた同家について略述する。

二代長吉良は天和元年生れ、次いでその子乗山が三代となり、その子泰庵が四代目となるが、泰庵が同家歴代中、学業・行動最も顕著であつた。

服部泰庵は、諱は元伯、字は松郷、積翠堂と号し、また大衡道人、黙仙とも号したが、一般に泰庵が行われた。幼少時代は専ら関口雪翁に学び、寛政の初めに江戸に遊学、時の幕府の侍医兼医学教諭の吉田快庵の門に入り修学数年、大に進渉し去つて東北地方を巡歴し、ついにエゾ（現今の北海道）に渡つて松前奉行に仕え、宗谷の極地に在ること四年、後帰郷し、弟道斎と共に父業を助けた。この間「傷寒論」の正文を検討した「医聖心印経」十三冊及「服家意教」一冊を著作し、「意教」は板行した。

しかし、ここで特筆することは、その当時この地で抗争を継続されていた、名産十日町織物の問屋業と地方農民との利害問題と、更に米穀の事情もからみ深刻な様相を呈した。泰庵は性来の一本気なる、直情径行から坐視に忍びず、遂に奇策を樹て、百姓一揆を企てたが、成らずして発覚、捕えられて遂に郷里を追れた。そこで日頃あこがれの神都伊勢の山田に孫達と移り住み、天保四年四月十七日この地に客死した。

弟道斎は、父祖の業を継承し五代となつたが、少年時代に出府し、吉田快庵に師事し、次いで幕府の医学館に入り、外科は桂川甫周、産科を賀川玄悦に学び、後京都に出て吉益南涯に就学、業成つて大和に開業した。やがて四国九州に漫遊し、至るところの名家を歴訪して病理を究め、奇方を探り帰国して「漫遊探奇方法」七巻を著す。文化四年九月七日病篤く生地にて歿す。道斎体軀偉大、経史に通じまた詩文を善くし、交友には一代の名流が多かつた。

次いで六代淳庵、七代藪軒（最も泰庵に似る）八代祥山、九代貞造を経て十代当主服部博氏であるが、祖先の業は弟章氏が継続している。

（埼玉・深谷市・薬学）

我が国の歯科医学分科史について

鈴木　勝
谷津　三雄

㈠　本間玄調の歯科（口腔）外科
㈡　名古屋玄医の歯口科

㈠　本間玄調の歯科（口腔）外科

本邦における歯科医学史に関する著書は、極めて少なく、川上為次郎（歯科医学史、歯科医学史提要）、山崎清（歯科医学史）山田平太（日本歯科文化史、日本歯口科史）ら三氏の著書をみるにすぎない。

これらのうち、日本における歯科医学史についての記述は山田氏の著書があるのみである。

一方、現在の歯科医学の臨床は、歯科保存治療学、歯科補綴学、口腔外科学、歯科矯正学、歯科放射線学、小児歯科学、歯周病学などに分科されている。従つて一般医学の内科史や外科史、産科史のような分科史の研究とあいまつて日本歯科医学史もまた、これらの分科史（歯科治療史、歯科補綴史、歯科放射線史、口腔外科史、など）についてしらべる必要があろう。

前記山田平太氏の著書は、主として兼康流や親康流で代表される日本の歯口科治療史を、また、木製義歯や楊枝、湟歯などの歯科補綴史、或は、歯科社会史等について極めて詳細に記載されている。しかし、口腔外科史については歯を結紮して索引する法や、歯落薬を数日つけて歯を揺がせた後、鉗をもつて抜く法などわずかに記載されているにすぎない。

それは思うに、口腔外科たる領域は、現在においても外科、耳鼻科、歯科などの境界領域に属していることから、おそらく昔も同じであつて、主として本道からわかれ、薬物療法を行つた歯科医よりもむしろ一般医（特に瘍医）によつてなされたことが多くあるためと思われる。

従つて、口腔外科史をしらべるには従来の歯科口中書（兼康流、親康流など）のみならず、外科（瘍科）書により求めなければならない点も多いのではあるまいか、以上の見地から今回演者らは歯科医学史の分科史の第一報としての口腔外科史を本間玄調著「瘍科秘録」正、続十五冊の中から歯科（口腔）外科に関する内容のものを選び、更にこれら記載を現在の口腔外科と比較しつつ若干の考察を試みてみたいと思う。

㈡　名古屋玄医の歯口科について

歯口科といえば、兼康流か、親康流のいずれかの流れをくんでいるが、周知の如く兼康流とは丹波兼康の口中療法を継承したもの、親康流とは兼康から五世親康とその長男宗康の口中療法と伝えたものをいつている。

そして、この歯口科は江戸時代には専業とする口中科医が増え、兼康流や親康流の他に、間中一安伝、曽根祐碩伝、酒井玄橘伝、小林良仲伝、二宮献伝、津田長安伝、水上光祐伝、福生流、近藤威徳院伝、などがあり、従つてこの時代にはこれら口中療法を伝えた口中書も多く、山田平太氏（明治前日本医学史四巻、日本口歯科史）によると七〇種類以上と記載されている。（とはいえその主流は兼康流と親康流であることはいうまでもない）

一方演題の名古屋玄医（一六二九～一六九六）は本道で、しかも古医方で立つた人で特に歯口科を専業とした人ではないが、その著「医方問余」（一六七九年の著述）は、当時の医学全書でそのうち巻の十五は、口科門として一冊になり、口瘡、牙歯門、咽喉門唇部などにわけて記載されている。

しかし前記山田氏の口中書目録中に、この「医方問余」の口科が記載されていないので、今回この「医方問余」の歯口科編中特に牙歯門について若干の考察を試みてみたいと思う。

（日大・歯学）

「読腹証奇覧」を読んで

矢数道明

日本における漢方医学の特質として、腹診法の発達があ

げられている。このことについては既に大塚敬節氏の詳細な発表がなされた。

過般東京医大に於て、同大学図書館所蔵の貴重本の展示解説を、本会の例会として行つた。そのとき私は、「腹証奇覧翼」の著者和久田叔虎が、その師稲葉文礼の著書「腹証奇覧」を読み、その誤謬を指適して自己の卒直な意見を披歴した「読腹証奇覧」について紹介した。この書を更に精読して、その著述前後の事情や、叔虎が指適した条項等を紹介し、腹診法の実態にも触れてみたい。

（東京医大・薬理）

「臓　画」

森　優

「臓画」は本文十二頁の毛筆書。明和二年（一七六五）の作。著者は不明、しかし、最後の頁に平戸、日高伯均、謹図とある、この日高を著者と考えてよいと思う。書物の型は一般の和書の型。

説明文四頁。図は十二個八頁。

説明文の字数は六四八。著者が臓志を読んでいることは説明文を見ると明らかである、そのためか、記載の順序、説明のしかたが「蔵志」によく似ている。

解剖所見の記載は「蔵志」に書いてあることよりも詳しい。

一、心臓については、

(1)　正中の一系は曲折して脊骨を下る。

(2)　右左の二系は首頸に循る。

(3)　右側の一枝は手臂に下る。

という記載があるが、これは下行大動脈、総頸動脈、腕頭動脈、右鎖骨下動脈を見ての記事であろう。

二、睾丸を陰丸と名づけ、これから白筋が出て小腹を循りて腰中に入ると説明している。精索の剖出を試みたものと考えてよかろう。

三、精道なる者、襞内を循りて曲骨に隠るという説明がある。精管を知つていたようであるが、それが膀胱のあたりからどうなつているかを著者は、はつきりさせていない。

四、総腸骨動脈、内腸骨動脈、外腸骨動脈にあたると思われるものを図示しているが、これについては説明してい

ない。

五、　脊骨を二十一節を以つて図示している。棘突起にあたるところを上方に向けてかいている。

六、横行結腸を描き、それに結腸膨起と思われるものを書いてある。

七、肛門なる語が見えている。

要之、「臓画」の図譜は「蔵志」よりも詳細である、そして、図譜には、どれがどれと確定する事はできないが、オランダの解剖学書の図譜に（例えば、バルトリンの解剖学書）に似たところがあるのが感じられる。（九大・解剖）

「蘭学事始」の写本についての諸問題

内山　孝一

福沢諭吉が「蘭学事始」と改題して明治二年正月にはじめて出版された本といくつかの異本とそれについての校訂がなされてきた。それはこの本が日本の文化の発達にとつて重要であり、またオランダとの関係を知る上に、役立つからである。松村明によれば、「蘭学事始」の写本には八種あり、それを大きく三種に分類したのは適切な処置と考えられる。

蘭学事始と題した本について

一、明治二年刊本　福沢本が底本

二、明治廿三年刊　福沢諭吉の序

三、文明源流叢書本　大正二年刊

四、復元試本刊　医学古典会校訂

五、岩波文庫本　緒方富雄校訂

蘭東事始と題した本について

一、村岡本　大規玄沢序文

二、佐藤本　大規玄沢序文（富川　游、山崎　佐）現存不明

三、小石本

四、矢野本　不完本　現在所有者不明

五、平戸本　小石本の転写本

六、小石本　和田校訂刊

七、小石本　松村校訂刊

和蘭事始と題した本について

一、内山本

二、福沢本

三、幸田本　新らしく表装し、題筌は蘭学事始
四、内山本　内山校訂刊
五、福沢本　富田校訂刊

今までに村岡本・矢野本・佐藤本と幸田本の四写本については、まだ充分に校訂し紹介されるまでに至つていないのは遺憾である。

殊に杉田玄白本と大槻玄沢本、また神田孝平本は今どうなつているかが気がかりになる。私は杉田・大槻・神田本の三つがいつかは発見されるであろうことを期待する。これらが文化史における重要性から考え、私どもの時代にめぐりあいたいと思う。

ここでは以上の一般論とともに具体的に「和蘭事始」内山本について（再び）述べ、志を同じくする人々の教示を得たいと思う。「蘭学事始」についてこれから同志と協力して研究を進めて行きたい。

（日大・生理）

大槻玄澤著「西賓対晤」に関する研究

大鳥蘭三郎

江戸時代に行なわれたオランダ商館長等一行のいわゆる参府旅行が日本とオランダとの交渉のなかで大きな比重を占めている。ということはよく論ぜられている。このことがひいては日本の西洋との折衝の窓口となつて日本の近代化の一の糸口となつていることはたしかであると考える。この意味からオランダ商館等一行の江戸参府に関する研究は大きな意義を有しているものと思われる。

それ故この種の問題は数多く論ぜられているが、何分長期間に亘る事柄であるので、このことについての全般的の研究はなかなか容易な業ではない。管見では呉博士のすぐれた労作があるが、オランダ商館長等一行の参府旅行については直接には余り触れていない。またオランダ商館長自身が記した参府日記が一二知られているが、日本側のこれについての根本資料は余り見当らないようである。

ここに紹介しようとする大槻玄沢の「西賓対晤」と題する写本一冊は大槻玄沢自身が六回参府オランダ人と面接して対談を行なつた顛末を記し、またこのために要した手続きの一々の実際例をあげて説明している。時代は稍々降るものではあるが、オランダ商館長一行の江戸参府に際して行なわれた日本人学者との会談内容をくわしく説明したき

わめて珍重すべき記録である本書を紹介し、それに若干の考察を加えてみたい。

（慶大・医史学）

藤井方亭と加賀藩

津田　進三

宇田川玄真の名著「医範提綱」の完成を助け、特に「内象銅版図」には題言を書いている藤井方亭は、また加賀藩最初の蘭方藩医である。この方亭の生涯に関しては従来殆んど知られて居らず、僅かに「近世名医伝」「本朝医人伝」等に概略が見られるのみである。私は郷土史料などから知りえた事の若干を御報告申し上げ、御叱正を伺いたいと思う。

一、文化五年十二月八日前田斉広（ナリナガ）（藩主十二代）の招きで金沢へ来た宇田川玄真は、前藩主治脩（ハルナガ）を診察したが、この時方亭（当時芳亭）も之に従つた（加賀藩に於ける蘭方治療の初めである。）

一、翌文化六年十二月二十八日方亭は加賀藩最初の蘭方藩医に召出された。（藩制により藩主への方剤を監するため翌七年吉田長淑も招かれ藩医となつた。）

一、弘化元年十月老を以て退くまで、実に三十五年間に亘つて方亭は藩侯一族の治療に当つた。中でも斉広正室真竜院、同側室で、斉泰（ナリヤス）生母の栄操院、十三代斉泰、斉泰正室で徳川家斉の娘溶姫（景徳院）十四代慶寧（ヨシヤス）、更には斉広の娘勇姫の婿大聖寺藩主前田利極（トシナカ）などの主治医として活躍し、藩内に下は勿論徳川家からも賞讃をうけている。

一、文政五年出版の「増補重訂内科撰要」に「加賀、藤井方亭増訳」とあるのは、藩医の医務に専念のためか蘭書の飜訳は見られず、僅かに藩医大高元哲訳「泰西雷説」（文政初年？）を吉田長淑と共に校訂したのをみるのみである。

一、弘化二年八月九日方亭の死に臨み、加賀藩は人参料として金三千疋を贈つて、大いに彼の功績をたたえている。

一、安永七年四月二十八日藤井周朔の長子として生れた方亭には三子あり、長男方朔、及びその子方省はいずれも加賀藩医となり、次男三郎は幕府天文方に召出された英学者であるが、不幸夭折した。

（石川・金沢市・小児科）

藤井方亭の資料「柿園文鈔」について

藤井　亭己

藤井方亭の資料は稀少と云わる、従つて、その資料批判を充分行い得ぬためか方亭は史家の視覚から遠ざかり、蘭学史上存在意義を失なつている。而して適々方亭につき、「近世名医伝」を始め二三の文献を散見するが、誤記や重要事蹟が漏れ、これらの資料に拠つて方亭の真相を知る事は聊か困難であろう。又その蘭学上の実力は、宇田川関係文書、当家蔵文書、伝承資料等により知るが、方亭の解明にはなお不充分且つ化政期に於ける当家蘭方の世評は全く知られていない。

斯の如き現状の方亭につき、真実簡明に経歴の大半を記録し、更に特記すべき意外の史実を明にした資料が今回発表の「柿園文鈔」である。此の文書と家蔵の方亭伝其の他の文書と綜合検討すれば、やがて方亭の全貌が略ぼ明となり、連れて、宇田川蘭学発達過程に於ける方亭の重要性、而して日本蘭学史の再考を促し得るであろう?。

此の「柿園文鈔」とは「洞達亭遺稿」中に集録された帆足万里の秀れた門弟佐野柿園の記録である、柿園は、豊後杵築藩士で蘭学修得のため江戸に来り方亭へ入門、四カ年余の在門期間中知つた方亭の人物学問につき、江戸から文政五年（一、八二二）仲冬恩師万里に書き送つた書翰「呈帆足愚亭先生書」の事である。然し柿園は天保六年（一、八三五）十二月惜しくも三十九才で病歿した。

いうまでもなく、此の文書の重要意義は、方亭の健在中知悉した事を卒直に恩師に報告した所に注目の要ありと思う。即ちその人物を後世に伝えんため書いた一般伝記類と大に異る点は興味深々たるものあり、その資料的価値は蓋し重且つ大なりと思い、茲に詳述の要あるも紙面に制約あり其の文意を略述するに止む。

「柿園文鈔」の主なる文意

一、柿園は方亭の述懐に対しその言謙にして自ら許すと評した。

二、蘭語の実力は藤林普山と大同小異、その学才は淳道に過ぐと言わる。

三、門弟教育は始めから蘭語のみを用い訳を附せず各自の考えに拠らしめた。

四、「医範提綱」筆記は藤井方亭である。

『諏訪俊は架空の人、実は藤井方亭なり』この意見は方亭の新資料として故岡村先生の御支持を得たが茲に確証を得た事はこの資料の最大価値であろう。

五、槐園の「西説内科撰要」に誤訳あり、方亭之れを校正せるは最も勤めをなせりという。

六、蘭方の三大家、その三大家とは、宇田川榛斎、藤井方亭、青地林宗を明記している。（藤井家十三代）

「依百乙薬性論」について

佐藤文比古

本書はオランダのアドルフス・イペイ著 Handboek der Materia Medica の補正版を、青地林宗が訳したもので凡例によると文政六年仲春にできあがつたものである。当時の薬物学は『薬剤ノ徴候、効能、時宜、用法、製造等ヨリ以テ病ノ症状ニ従テ効害アル地位ニ至ルヲ知ル』ものであつて、その分類は、

一、辞書の如く薬品名頭文字の韻に従う。

二、植物学の人為分類法によるもの。

三、当時の生理学の一説与酸奪酸の説による。

四、合薬家舎密家の説により分ける。

五、天地間の三属に由て分ける。

六、薬効の尤も著明にして指書すべきものを取つて之を分ける。

この最後の法を採用したのはイペイが最初で以後の薬物学書は多くこれによつた。これら文政年代の訳述書の分類を示すと、

依百乙薬性論	和蘭薬性弁	用薬略記
○緩下剤	緩下薬	下剤 Apertica
勁下剤	中下薬	Laxantia
○峻下剤	峻下薬	Drastika
○吐剤	吐薬	吐剤 Emetica
○利尿剤	利尿薬	利尿剤 Diuretica
○砕石剤	砕石薬	Lithotriptica
○発汗剤	発汗薬	発汗剤 Diaphoretica
通血剤	通経薬	通経剤 Emmenagoga
殺虫剤	殺虫薬	○駆虫剤 Anthelmintika
○駆風剤	駆風薬	駆風剤 Carminatica

泄粘剤	瀉粘薬	○吐涎剤	Ptyalagoga
○祛痰剤	導痰薬		Expectorantia
○清涼剤	清涼薬	清涼剤	Temperantia
融解剤	開壅薬	○解凝剤	Resolventia
軟和剤	○緩和薬	軟和剤	Relaxatia
○強壮剤	健補薬	強壮剤	Roborantia
○収斂剤	収斂薬	収斂剤	Adstringentia
調酸剤	○制酸薬	制酸剤	Antacida
○神経剤	壮神薬		Neurotica
○鎮痙剤	鎮痙薬	鎮痙剤	Antispasmodika
麻剤	麻薬	麻神剤	Narkotica
○腐蝕剤	腐薬	腐蝕剤	Caustica
		○催嚏剤	Ptarmica

○は医学辞彙（明治一九年）に記載あるもの、これらの書によって当時蘭医を志すものは薬物学のいかなるものであるかを知った。

（明治薬大）

ポムペの梅毒学講義について

中野　操

大日本官医員、崎嶼養生館都頭兼医学教授、蘭疇、松本良順源之蔑、聴講訳述にかかるポムペの「梅毒論」（写本）について述べたい。

（大阪・内科）

Comerford の日本印象記

鮫島　近二

英医Willisと仲よしであった英国海軍々医のComerfordは元治元年（一八六四年）五月二十八日横浜到着、翌慶応元年（一八六五年）八月二十四日離日、約一年三ケ月の滞日に過ぎなかったが、その間に日本の国土、気候、風俗、人情、下ノ関事件、横浜の岩亀楼、治療法、伝染病等々興味深く描写して居るからこれを抄訳して大意を述べたい。

（東京・眼科）

封建制下の農民の保健状態(第二報)

松田　武

第六五回総会で、過去帳その他古文書を基礎史料として、大和国吉野郡高原村の保健状態を人口変遷の動向をとおして考察を加えた。就中、陸の孤島的な閉鎖村落が天保の大餓饉によつて、どのような影響をうけ、また飢餓と死亡の状態が村落内の諸階層に、各年令層に、性別にどう現われたか、を第一報として報告した。

今回は同じ畿内のなかでも経済的発展段階として中間に位する村落と先進的段階にあるといわれる二つの村落を対象に調査結果を報告する。前者は近江国野洲郡江頭村、後者は摂津国武庫郡上瓦林村である。第一報で扱つた高原村とこの二村落を加えた三村落は社会発展度からみれば、三つの段階にあると考えられ、それぞれの村落の人口の動態の様相を比較検討することにより、農村の健康状態の歴史的段階を推定しうる手掛りになりうると考えている。

報告の論点として①幕藩制下「人口停滞」の意味。自然増と社会増、②年令別死亡の構造、③出生の状態、④農民の医師にたいする要求度、⑤過去帳、宗門帳などの史料価値等々である。

(阪大・衛生)

田口和美と明治の解剖事始め

小川鼎三

大学東校が形屍解剖の許可をえたのは明治三年十月廿日である。その当時田口和美がもつとも熱心に実地の解剖をやつたようである。田口は天保十年に武蔵国北埼玉郡太田荘藤畠郷に生れ、若くして江戸にでて、林洞海、佐藤一斎らに学び、文久二年から下野国佐野で医業を開いていた。明治維新となり田口は妻子を郷里藤畠の父田口順庵に托して明治二年に単身東京にでて医学校兼病院において研究をつづけんとした。時に卅才である。彼が解剖学を専攻するといつたのはその後のことであろう。

いま東京大学に残る書類によると田口成庵は三年十二月に准少得業士となり、四年五月には大学出仕少得業生准席から大学出仕中得業生准席に昇進したことがわかる。明治

三年八月三日付と思われる佐藤尚中より佐倉の岡本道庵あての手紙に大学東校句読師の田口成庵は脚気のため田舎で養生した方がよい、佐倉は教師が足りないで困るようだから、田口をそちらで世話してもらいたい。同時に塾生に教えさせたらよかろうとある。

同年の暮には田口は東京にもどつていた。十二月十二日付で彼は佐倉の岡本あて近況を書いたあとに『東校解剖局御開ニ相成候以来ハ人体解剖殊之外盛ニ御座候乍不及野生共モ当局ヨリ出張仕候』と付記している。

岡本道庵（佐藤舜海）の養子、佐藤恒二は右の手紙に昭和七年五月付で次の説明をしている。

『文中田口成庵トアルノハ後ノ田口和美博士ニテ脚気療養ノタメニ佐倉ニ来リ塾生ニ英語ヲ教ヘ又絵画ノ素養アリシモノト見エ塾生ノ需ニ応シテ我家所蔵ノウエーベル(?)解剖図ヲ謄写シテ衣食ノ費トナセリト云ヘリ、従前医業ニ従事セルコトアレトモ実地医家ハ自カラ適セサルヲ感シ病愈エテ帰京後ハ佐倉ニ於テ留得セル解剖学ヲ以テ身ヲ立テント決心シ……』

なお田口は明治二年八月十四日の美幾女の特志解剖において左上肢の検査をうけもつたこと、明治三年の七月に田口は大学大博士の佐藤尚中からハイツマンの解剖書を得て大いに利益したことが伝えられている。

（順天堂大・医史学）

日米医学の関連

長門谷洋治

戦前のわが国の医学はドイツ医学が主流を占めたが、戦後はアメリカ医学が主流を占めるところとなつた。

ところで、開国後最初にわが国に影響を及ぼした外国はアメリカで、その時点は（一八五九年）一〇月一六日、J. C. Hepburn の来日である。しかしわが国のアカデミズムが、その範をドイツに求めることとしたので、明治初年以降はドイツ医学が圧倒的な力をもつこととなる。一方高木兼寛（慈恵）や吉田顕三（大阪医学校）によるイギリス医学も根強い力をもつていたが、アメリカ医学はとくにそれを主とする教育機関をもたなかつた関係もあつてか、わが国に及ぼした影響はさほど著明ではない。しかし宣教医療を中心とした活動のごときは殆どアメリカの独壇

場であつた。また、歯科医学や看護学は初期よりアメリカの影響を強く受けている。

戦前のわが国医学関係者の留学先はドイツが多かつたが、アメリカを選んだものも少なくなく、それらの人の帰国後の活動にも注目すべきものがある。また、わが国におけるアメリカ医学の一拠点であつた聖路加国際病院のあゆみも貴重である。

戦後のアメリカ医学の移入は占領下という特殊な環境のもとで行なわれたものであるが、この場合はすでに西洋医学を主としたわが国独自の医学体系ができあがつていたところへの移入であるので、初期の場合と同じように論じることはできないけれども、その影響力という点では、かなり大きなものがあつたといえよう。

わが国は最初自らの意志でアメリカの医学を見捨てたのであるが後年自らの意志と関係なく、これを吸収せざるをえない立場におかれた。しかし結果論的にみて、これらの挙はわが国にとつてマイナス面よりむしろプラス面の方が多かつたと思われる。すなわち、十九世紀のアメリカの医学は西洋諸国のうちではむしろ後進国の方に属しており、真に独自の体制を整えたのは今世紀に入つてからであるといつてよい。ことに終戦当時にはトップレベルにあつたと思われる。

かく日米医学の関連はすでに百年余に達し、その歴史を知ることはひとり医学面のみならず文化史的立場よりもきわめて興味あるものがあると思う。

（大阪・日生病院・皮膚科）

金井泉博士著「臨牀検査法提要」の初版刊行について

会田　恵

本邦において出版された臨床検査法一般に関する成書の中で本書は今日に至るまで最も長く且広く利用されたいるもので、初版は一九四一年（昭和一六年）に出版されており、今日まで二十三版を数えている。

ところで本書の母胎はそれより以前著者が海軍々医学校で『生物学的臨床診断学』の教科に教材用として使つたテキストであつて、これが金原商店の要望により公にされた

という事は今日知つている方も多いと思うが、本書の生い立ちは第二次大戦以前の本邦における臨床検査の実態をよく物語るものと考え、初版刊行の経緯を述べてみる。

著者は一九二八年より海軍々医学校の教官となり『臨床診断学』の中（当時は生物学的、理化学的及び理学的診断学の三教科が教えられていた）『生物学的診断学』を担当し、既に当時より臨牀検査法の研究を始め一九三一年ドイツ留学中もこの方面の勉強を続けて一九三六年十月に第一回編纂を行い海軍々医学校の名前で標題を「生物学的臨牀診断学」として印刷に付し要綱を示されたのである。これについて著者がたえず自らの経験を骨子として内外の文献を参照しながら三度改訂増補を行うなど苦心を続けられる中に、当時類書は本邦にはなく欧米でも微々たるもので本書が重宝がられ価値が次第に認められて各地の大学研究室から本書の入手を希望する様になつたのである。

この頃金原商店編集部の梅室純三氏が海軍々医学校にも出入りしていた関係で本書に着目し現在の金原出版社々長金原四郎氏にもすゝめられて著者に懇望し高杉海軍省医務局長の許可を得て刊行しこゝに初版約一五〇〇部が世に出された。

初版の内容は二二七頁であるがそれより二年前に海軍々医学校で第二回編纂として出したものは一六四頁であるからこの間に一〇〇頁以上に及ぶ増補の仕事がなされた事になりしかも初版の序文に述べられてある様に最も簡単にして正確な検査法を吟味して選び新法は充分追試してからあげるという極めて慎重に態度ですゝめられ大変な努力を要されたものと想像される。

要するに「臨牀検査法」を生んだ海軍々医学校における臨牀診断学の講義と実習並びに著者の努力は、当時臨牀検査法の未開拓の時代において極めて貴重な医学教育であり第二次大戦以前における臨牀検査教育として看過できないものと考える。

なお本書の内容についても歴史的となつたものについて少しく言及する

（新潟・柏崎市・内科）

富士川游先生の別号・筆名について

―富士川先生生誕百年に因みて―

赤松　金芳

富士川先生は、幼名を充人と呼ばれ、後ち游と改められた。別号または筆名としては、最初は「平気子」、ついで「筆花墨雨」「墨雨楼」「倦々斎」「迂斎」「丹霞」「丹霞楼」「楽庵」「福海」「墨庵」などを用いられたが、晩年は、主として「子長」または「子長学人」を号とせられた。

（昭和薬大）

歴史的人間、特に日本生理学の伝統と創造について

門山　孝一

一般に生理学は解剖学に由来することは明らかである。しかしここではそのことについて述べない。大沢謙二が日本生理学の開拓者であることは一般に認められている。彼以前において、江戸時代に、大矢尚斉・各務文献および伏屋琴坂が浪速の町医者として病者の診療をしながら、わがくにで、はじめて素朴ではあるが実験生理学の研究を試みている。このことは私の発見である。彼らが日本生理学の先駆者の役割りを演じたことは見のがせないと思う。私は既に大沢謙二を、また江戸時代の前記の人々について研究し報告した。しかし彼らの創造は大沢へ直接には結びついていない。すなわち大沢の創造にとつて伏屋らの創造は伝統として受け流されていない。しかしその連絡は、両者の隔たりを超えて、いわゆる蘭学時代により一応はつけられているといつてよいであろう。けれども表面的には伏屋らと大沢の両者の創造は伝統されないで中断しているといつてよい。一般に日本の学問芸術にはこのような中断が見られる。特に明治維新前と後の間に中断が際立つているように思われる。

なお大沢の創造にはティゲルとゴルツを視野の外におくことはできないから、日本生理学の創造のはじめはドイツ生理学の伝統に負うことは事実である。同様に伏屋らの創造にとりオランダ医学の伝統を受けていることも事実である。このような国際関係のもとに日本生理学の創造がなされ伝統ができた。現段階においても同様の状況にあるといつてよい。

一般に文化は伝統の上に創造の道を開拓しなければ、伝統も中断され、創造も深く進められるに充分でないことが

発生する。歴史は読むものでなく作る Don't read the history, but make it by yourself. ものといわれる。またアルファはオメガであり、終りは始めの中にあるという。過去は現実と未来の中にある。現実は歴史的現実であり、人間は歴史的人間である。過・現・未の三つの時代は、歴史的過去現在未来である。歴史的現実は過去と未来を内包するといつてもよかろう。

物理的・生理的・心理的時間がいわれるが、人間的時間特に人間の生命体験の時間がある。永遠の今、円環的時間ともいい、道元は有時または而今ということばでその間の消息を表現している。

孔子は論語に、逝く水はかくのごときか、昼夜をおかずといつた。古代ギリシァ時代に、ヘラクライトスはパンタ・ライといつた。万物は流転する Heraclitus: Panta rhei: all things flow. という。俳聖芭蕉は旅に生き旅に死んだが、彼が一生につかんだ境地は不易流行である。人は易つて易らない、また易と不易の矛盾的自己同一を表現した。生理学者カレルは人間この未知なるものの中に人は川のように変つて変らない Alexis Carrel: Man, The Unknown "Like the river, we are both change and permanence." といつている。芭蕉とカレルは全く同じ境地に立つている。両者が三百年の時空と個性と文化のねらいはちがいながら、ゆくりなくも同じ境地に立つていることは、真実を表現しているからであろう。このことに私はおどろきと喜びと尊敬の念をもつ。

生きている人間はかかる状態にあるというのが真実である。私どもは矛盾の真只中にある。文化の創造により伝統は生かされる。現在と思うときすでに過去となり、未来と思うちに現在となるから、現実はとらえられない。文化の創造は生命体験によつてなされるが、生命体験の光景はとらえることも表現することもできない。そこに人間は真に生きる。

文化は創造したとき伝統となり、その伝統は新らしい創造にとり入れられ無限に発展する。こゝに歴史的人間があり、彼が歴史を創造する。

（日大・生理）

切手で見るオランダの医学史

古川　明

日本の医学史がオランダ医学と密接な関係をもつていることは云うまでもない。わたくしは、オランダの医学史を知るための一つの手段として、郵便切手を利用した。オランダが世界に誇る自国の医学者として、発行した肖像切手は、次の十三名十七種に達している。このなかには、医師ではないが、医学に貢献した科学者も含まれている。これらの切手写真を供覧して、その偉業を称えたいと思う。

Boerhaave, Swieten, Sylvius, Donders, Leeuwenhoekらは、日本の医師に良く知られているが、あまりなじみのない人もあるので、その略伝にも、少しく触れてみたいと思う。順序はアルファベット順とした。

1) Boerhaave, H. (1668—1738)
2) Camper, P. (1722—1789)
3) Deventer, H. v. (1651—1724)
4) Donders, F. C. (1818—1889)
5) Guyot, H. D. (1753—1828)
6) Ingenhousz, J. (1730—1799)
7) Kolk, J. C. S. v. d. (1797—1862)
8) Leeuwenhoek, A. v. (1632—1723)
9) Mathijsen, A. (1805—1878)
10) Riebeeck, J. v. (1619—1677)
11) Swieten, G. v. (1700—1772)
12) Sylvius, F. de La Boe (1614—1672)
13) Wier, J. (1515—1558)

Boerhaare の切手は、一九二八年と一九三八年の二回に異つた図案で発行され、Riebeeck の切手は、一九五二年に、同図案四種で発行された。以上により、全部で十三名十七種になる。

(東京・篠原病院・内科)

ゲーテの「ファウスト」に於ける医学的事項について

藤森速水

ゲーテの詩篇「ファウスト」の中には医学的用語が随所に見られる許りでなく、医学に関するゲーテ自身の考え方又、その当時の医学や自然科学の状態が随所に窺われる。

今、そのうちの若干を採り上げてみよう。

第一部第五場、アウエルバッハのあなぐらの場面に、ローマ法皇選挙の資格を論ずる所と第二部、ペネイオス河の上流の場面に性器の奇形、Hermaphroditen を引用してあ

る。ゲーテがこの医学用語を敢えて用いたのは単なる興味からではなく、奇形に対する彼の深い関心からである。

第一部、第一幕、仮装舞踏会の場面に痛風や外科医という語が用いられているのも、ゲーテがこれらの事に特別な関心を持っていたからである。

第二部、第二幕ワーグネル博士の実験室の場面は、人造人間（Homunculus）成功の場面であつて、これは現代医学に於ける人工授精や更には試験管内受精卵培養を予言したものとも考え得よう。

第一部、献詞、開幕の前戯の場面に Wehen という語が用いられており、これを日本の文学者等は「潮」とか或は「悲しみ」と訳しているが、私はこれを医学用語「陣痛」と訳するのがゲーテの真意を伝えるのに適当であると思う。この理由について解説し度い。又、現今の宇宙旅行をゲーテは既に予言し、ファウストの詩篇の所々に宇宙への飛翔の事を述べている。

以上の他、醱酵、ペスト、睡眠薬等の語が用いられ、ゲーテの医学に対する造詣の深さが窺われると共に医道に関しても一見識を持っていた事は現代医学上から観て興味深く且教えられる所が多い。

（大阪市大・産婦人科）

一元的体系による医学史研究、東西医学一元論

三木　栄

医学とは、科学に則とり個人及び人類の疾病と健康の諸機構諸原因（基礎医学）並びに診断治療予防法（臨床応用医学）を探究探知し（以上「学」、狭義の医学）、実地修練によりそれらの技術を習得し（以上「術」）、以て疾病を除去し健康を増進し福祉の向上を図り（以上「行」）、これらの実行に当たり医道（仁愛）を以て完きを期する、学問である。

医学史とは、医学が一元共通性であるという線に沿うて自然界人間界に現われた医学の事跡を研究しこれらを記録し、以て過去と現在さらに未来をも結ぶ実理法則を知り、研究及び診療において依拠史料となり指針となり得るもの医学本体の歴史である。

私は、医学と医学史とに対し右の如く定義した。これは多年医学史の研究に従事した自分の考えの決算的一成果で

ある「一元的体系による医学史研究・東西医学一元論」から導き出されたものである。本文は近く出版公表の予定であるが、前以て諸賢に提示し批判叱正を得たいと思うのである。

（大阪・堺市・内科）

第十九回国際医史学会の報告

大矢　全節

報告者は一九六四年九月七日から十二日までスイスのバーゼ大学で開かれた同学会に日本医史学の会員として出席して、「日本における刺青の医史学的経過について」講演する機会を得て、無事大役を果たして昨年の秋帰国した。そこで、同学会で得た印象などについて報告する。

まづ同学会で採りあげた主題は

① Veraliusとその時代

② 医療の史的変遷

③ スイスは医史学に如何に貢献して来たかであり、これらの主題のいづれにも属しない題目を一括して

④ 自由課題に分類して、研究発表が活潑に行われた

参列者たちは、同大学附属図書館で十六世紀のヨーロッパ医学に関する資料展を観ることが出来、またバーゼル博物館に保存されてある薬学史料展を訪れることが何よりの収獲であつた。

学会は主題　3部門の発表には同大学の大講堂で多数の会員を集めて行われたが、自由課題の発表は幾つかの小講堂に分散して特別の関係会員の小グループの集会の形式で発表されたが、ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語スペイン語などいろとりどりの各国のことばで話され、国際学会ならでは味え得ないことばの問題が痛感された。

これらの講演の詳しい内容はスイスの図書出版社であるS. Karger A. G. から、近いうちに一括して一冊の書物として出版されることになつている。

この機会に国際医史学会の改選が行われて、主なる役員は次の如く決定した。

会　長　Wickersheimer

副会長　Artelt, Pazziui and Bariety

常任幹事　Sondervorst

幹　事　Duliu

会　計　Simon

なお、次回、第二十回国際医史学会の開催地および期日は追つて発表の予定になつている。（京都国立病院）

日本医学放射線科学・技術史年表

今市　正義
故　笠原　和賀江
米田　賀子

これは、製作者今市が、昭和十一年以来、おりにふれて収集した日本の医学の領野を中心として、関連諸科学・技術にわたりその年々に生起した史的事象の経年的な累積であつて、私案の域から一歩も出るものでない。

いま、その一部分を取捨して、清覧に供するものである。故笠原和賀江に協力を求め、死後、米田賀子が史料の収集にあたつた。（徳島・放射線医学）

MEMO

医家へ謹告！

漢方処方の近代化

常用漢方処方のエキス化（散・錠）に成功！

古方・後世方の漢方処方で、現在、医家の常用されるものは、ほとんど製造発売しています。

小太郎漢方エキス剤は……

■従来、煎剤として投与していた漢方処方を、当社研究所にて真空技術による製剤化を開発し、脱水乾燥して粉末および錠剤としたものです。

■配合生薬をオートクレーブにより抽出し、含有成分のすべてと揮発しやすい精油成分を完全回収し、真空減圧乾燥法を行なつたものです。

■原料生薬の品質管理および製造工程管理は、当社研究所のスタッフにより厳重になされております。

■漢方エキス剤は一般薬品と同様に、そのまま分包し、投与することができます。

■漢方エキス剤の有効成分は、常に一定に保たれております。従来、漢方薬をご使用なき医家も、簡単に安心してご使用願えます。

常用量　1回　1～4g　1日3回
医家向薬価　1日分約12円～15円

呈　文献・リスト

小太郎漢方製薬株式会社

本社　大阪市東区道修町　TEL(203)-0084

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the
Japanese Society of Medical History.

Vol. 11. No. 2 Apr., 1965.

CONTENTS

Member's Presentations

The 66th General Meeting of the Japanese Society of Medical History.

Date: May 16., 1965.
Place: Tokyo University, Medical central Library.
President: Tomio Ogata.

The Japanese Society of Medical History.
c/o Department of Medical History.
Juntendo University, School of Medicine.
Hongo 1~1, Bunkyo-ku, Tokyo.